

## フーコー『監獄の誕生』 第三部第三章、一望式監視方式

10/02/22

S・A

### 1 ある都市でペスト発生が宣言された場合にとるべき措置は…

- ペスト、らい病（ハンセン病）など、伝染する病気による混乱。恐怖と死のせいで法の禁止事項が目立たなくなる状態、悪の混乱。

「199X年、世界は核の炎につつまれた！海は枯れ地は裂け、あらゆる生命体が絶滅したかにみえた！だが…人類は死滅していなかった！！世は再び暴力が支配する時代になっていた！」（『北斗の拳』冒頭）

- 混乱に対応するのが秩序。混乱を解明する。

秩序は各人にその居場所を、各人にその身体を、各人にその病気と死を、各人にその利益を定めるが、その場合に、個人が、つまり個人を特色づけるもの、個人に属するもの、個人に起こる事態などが最終決定されるまで規則正しく絶えず細分化される、偏在的で全知の権力をとおして、定めるわけである。（p. 200 上）

- ペストへの対応措置（17世紀末）。規律・訓練の図式をもたらした。

閉鎖され、細分され、各所で監視されるこの空間、そこでは個々人は固定した場所に組み入れられ、どんな些細な動きもとりにしまられ、あらゆる出来事が記帳され、中断のない書記作業が都市の中核部と周辺部をつなぎ、権力は、階層秩序的な図柄をもとに一様に行使され、たえず各個人は評定され検査されて、生存者・病者・死者にふり分けられる—こうしたすべてが規律・訓練的な装置のまとまりのよいモデルを組み立てるのである。（p. 199 下）

多種多様な分離であり、個人化を行う配分であり、監視および取り締まりの深くゆきとどいた組織化であり、権力の強化と細分化である。（p. 200 下）

- らい病への対応は閉じ込めのモデル、二元論的・集団的分離をもたらした。純粋な共同体への夢があった。

らい病者の方は [社会の外への] 投棄、追放=封じ込めの実務の中で抱えられるのであって、[個々人に] 際をつけることが重大事ではないとされる集団内でのように、その実務のなかで自分の姿を消すがままにされる。(p. 200 下)

- 規律・訓練と排除は異なるが矛盾しない図式。19世紀に接近がおこる。

排除空間へ、規律・訓練的な碁盤割りに特有な権力技術が適用されたのが、19世紀の特徴である。監禁の雑然たる空間へ規律・訓練の緻密な細分化を投影させること、権力の行う分析的配分の方法でその空間に対処すること、排除されたモノを個人別に取り扱うこと、ただし排除を明示するために個人化の諸方式を用いること… (p. 201 下)

- 権力機構はペスト、らい病それぞれへの対応という二つの形態の組み合わせである。

## 2 ベンサムの考えついた〈一望式監視施設〉は…

- パノプティコンはイギリスの功利主義者ジェレミー・ベンサムによって考案された刑務所設計にみられるシステムのこと。ベンサムの功利主義的考えに基づき、運営の経済性と収容者の福祉がベンサムの考える限りにおいて最大限に両立されている
- フーコーは、個人化を行う配分であり、監視および取り締まりの深くゆきとどいた組織化であるような規律・訓練の図式を体現する建築学的な形象としてパノプティコンを位置づけている。管理・統制がいきとどいた社会という環境の比喩。

〈一望式監視装置〉は、見る=見られるとい一対の自体を切り離す仕掛けであって、その演習場の建物の名部では人は完全に見られるが、けっして見るわけにはいかず、中央部の塔のなかからは人はいっさいを見るが、けっして見られはしないのである。……なぜならそれは権力を自動的なものにし、権力を没個人化するからである。(p. 204 上)

個別化をおこなう観察、特徴表示と分類、種の分析的な計画配置などと類似の配慮が見てとれるのである。(p. 205 上)

実験をおこない、行動を変えさせ、個々人を訓育したり再訓育したりする機械仕掛けとして活用できる。(p. 205 下)

### 3 ペストに襲われた都市と一望監視の施設…

- ペストへの対応とパノプティコンには差異あり
- ペストの場合には悪疫という状況に対して権力が立ち上がる。結局は生か死かの二元論的作用。殺すか生かすか。
- パノプティコンは一般化可能な作用モデル。仕組み。システムそのもの。

事実それは、あらゆる特定の用途から切り離しうる、しかもそうすべき、政治技術上の一つの形象なのである。(p. 207 上～下)

- だから応用がきく。その際、どの性質は失われない。

「道徳を改善し、健康を保持し、産業をよみがえらせ、教育を普及し、公的な負担を軽減し、盤石の上でのように経済を安定させ、貧民に対する法律の難問を、御璫ディオスの結び目を一等両断で解決するやり方でよりも丁寧にはどいていく、しかも以上の処置を建築学上の単なる着想でおこなう」(p. 208 下)

権力の行使が社会全体によって取締可能である透明な建物に変わるだけ (p. 209 上)

- パノプティコンにおける権力に国王の身体は不要。

〈君主権〉の節減をおこないつつ権力の効用を増大させるはずの、さまざまな身体と力の従属関係である。(p. 210 上)

### 4 規律・訓練には、したがって二つのイメージが…

- 封鎖と機構
- 封鎖とは、周辺部で確立される閉鎖的仕組み。悪の阻止、情報伝達の遮断、時間の中断など。
- 機構とは、権力の行使をより速やか、軽快、有効なものにする。

17世紀と19世紀における規律・訓練装置の漸進的な拡張であり、全社会におよぶその装置の多様化であり、概括して名付けうるとすれば規律・訓練的な社会の形成である。(p. 210 下)

規律・訓練のこうした拡張は、しかしながら、いっそう深部で起こった各種の過程の

最も顕著な側面にすぎない。(p. 211)

- [1] 規律・訓練の機能面の逆転：危険の消去から個々人の効用の増加へ

あいかわらず行為の道德化をうながす一方。しかしますます行為の目的化を促して、もろもろの身体を或る仕組みのなかへ、もろもろの力を或る経済の中へ組み入れていく。(p. 211 下)

規律・訓練が社会の片隅でのその周辺的な地位から脱し、排除や贖罪、閉じ込めや隠退などの形式から離れてくる (p. 212 上)

- [2] 規律・訓練の諸機構の分散移転：諸機構が《制度化を脱し》、《自由》になる

緊密にまとまって重々しい [過去の] 規律・訓練は解体して、しなやかな取り締まり方式、移し替え取込みうる取締方式に変わるわけである。(p. 212 下)

- [3] 規律・訓練の諸機構の国家管理：治安権力は「すべて」を対象にする。永続的で偏在的な監視が必要。顔を欠く視線のようなもの。監視の日常的な行使、警戒怠りない視線の交錯のなかで、見せ物本意名権力の示威が消えていった。

治安職をもってすれば、われわれは無限の取締の対象になるわけで、その取締りたるや社会のごく基本的な粒子にも、ごく一次的な現象にも理念的には追いつこうと努めるわけである。「治安を担当する法官および役人の職務は、最も重要な職務である。それに含まれる対象は、言わば際限が無く、人は十分に詳しい吟味をもってしか、その対象を認知できないほどである」。つまり、政治権力の無限小。(p. 214 下)

## 5 規律・訓練的な社会の形成は…

- 規律・訓練的社会は歴史と結びついている。経済→法律=政治→学問。
- [1] 規律・訓練は人間の多様性の秩序化を確保するための技術である。
- 多様な人間に対し、3つの戦術を打ち出す。①経費削減。②社会的権力がうまく、はやく行き届くようにする。③効用を増大させる。

例の規律・訓練の機会仕掛けでは、その仕掛けが結び合わせる個々人の力が組み合わ

され、それによって拡大されたが、そうした仕掛けこそは、こうした投影の結果である。あえて言うならば、規律・訓練は、身体の力が最低の費用で、《政治の》力としては縮小され、役立つ力としては最大にされる場合の、統一的な技術方式である。(p. 221 下)

- [2] 権力のパノプティコンの様式は、そのシステムが完全に独立しているわけではない。例えば18世紀には平等主義の体系化された法律上の枠組み設定と議会制、代議制に庇護されていた。

規律・訓練は一種の反＝法律だとかんがえる必要があるのである。その明確な役割は、乗り越えがたい不均斉の導入、相互関係の排除である。(p.222 下)

規律・訓練は物理的＝政治的な諸技術の一つの束であるにもかかわらず、それをあらゆる道徳の、控えめだが具体的な形式として考えてもらおうと固執する… (p. 223 下)

- 監獄の新しい位置づけ→p. 223 最後の段落

処罰する権力を一般化するのは、個々の法的主体における法の普遍意識ではなく、一望監視方式の規則的な広がりであり、そのカギ居なく緊密な網目である。(p.223 下)

- [3] 権力的成果の多様化。それは《技術論的な》敷居をまたいだことでなされた。病院、学校、工場などにおける規律・訓練は服従強制の道具となる。この絆から、臨床医学、精神医学、児童心理学、心理教育学、労働合理化などが形成された。
- 技術論において、システムとしてのパノプティコン様式は賞賛されなかった。学問的地位を獲得できなかったため。ある人間が別の人間に行使する直接的権力を扱うものだったため、華々しさがなかったため。
- われわれが夢中になっている科学の技術的母胎は規律・訓練。

権力が違えば知も違ってくるのだ。(p. 225 下)

- 監獄は工場や学校や兵営や病院に似かよう。

## 感想

素直に思ったことを書かせて頂きます。

うまく説明しきっていると感じた。宗教や政治権力の具体例を考えても、うまく当てはめられる例が多い。「視線」というモチーフは使いやすいですな。反論文も読んでみたい。フーコーの著作や生涯からは、異常を作り出すシステムへの怒りと、「自分探しなんてしなくていいんだよ」というメッセージを感じる。えらい人だ（参考：ジェイムズ・ミラー『ミシェル・フーコー/情熱と受苦』）。しかし、今の自分たちにとってフーコーの言説はとても魅力的である一方、全く実践につながっていかない悲しさがある。

就活しないと…！院はいくの？研究職・・・？

という感じ。ちょっと先の選択に、いちいち心惑わされている。少なくとも僕は。フーコーの論を真に受けて意味のない事を何もしない状況を想像したときの心細さは、何なのでしょうか。

難解といわれるフーコーその他フランス現代思想系の仕事は、なんとなく読まないとなあって思ってしまう。ニュー・アカの残滓をすくっているようなむなしい気持ちにもなります。だって、時間もエネルギーもかかるしね。難しい本読むのって…。

うしろ向きなコメントですみません。それでも読書会は意義あることと信じております。